



クボタフィロマンディーネンオルケスター

KUBOTA PHILOMANDOLINEN ORCHESTER

ドイツ演奏旅行

2010.5.28-6.7

いよいよ始まった、
クボタフィロマンディーネンオルケスターのドイツ演奏旅行。
5/28～6/7まで、11日間の長旅で、
3つのコンサートを予定している。

5/29(土)は、ドイツに到着して早速、キードリッヒという小さな町で、
ドイツで有名なヘッセンオーケストラとの合同演奏会を行う。
翌日5/30(日)には、ヘッセン州のシュタットアレンドルフの音楽祭に、
参加する。
そして演奏会のメインとなるのは、4年に1度、ドイツで開催されている、
eurofestival zupfmusik(オイロフェスティバル ツプムジーク)への
出演である。
今回のユーロフェスティバルは、
南ドイツ ラインラント・プファルツ州のブルッフザールで開催される。

海外への演奏旅行は、2004年のロシア公演以来、2回目となるが、
今回はどのような旅となるか、今からとてもワクワクする。



静かできれいな、キードリツヒの町での演奏会。
町を挙げて我々を歓迎してくれ、
市庁舎に招かれ、市長のご挨拶を頂いた。
高原にある木造の会場は、小じんまりとしていたが、
音響はとても良かった。
ステージは、白と赤でデザインされたキードリツヒの旗や、
ト音記号などの装飾がされ、素朴だが素敵なステージだった。

この日は、ドイツでは有名なマンドリンオーケストラである、
ヘッセンオーケストラとの合同演奏会だ。
合同で演奏する曲は、
ヘッセンオーケストラの指揮者であるケルペラー氏作曲の、
Vishnu ~Times of Struggle~
そして久保田氏作曲の幻想曲第1番
である。

リハーサル。言うまでも無いが、
この日初めて一緒に演奏した訳であるが、
初めてとは思えないほど、纏まったリハーサルだった。
両オーケストラと指揮者の高い技術もそうだが、
何より合同演奏する曲を皆が愛していて、
気持ちを合わせて演奏できたことが一番の理由だろう。
一度通した後、時間も無い中で、指揮者は効果的に曲を作っていく。
かつて6年間ヨーロッパ留学していた久保田氏は、
ドイツ語と日本語で指示を出す。
ケルペラー氏からも久保田氏からも、
作曲家本人から直接指導して貰えるのは、大変貴重なことである。



いよいよ本番。ドイツで初めての演奏会。
まずは合同で、ケルペラー氏のVishnuから。
Vishnuとは、ヒンドゥー教の神で、
三位一体論では3つの最高神の1つで、
世界を維持する役目があるとされる。
白い大きめの法衣のような衣装のケルペラー氏。
まるで自身がVishnu神であるかのようだ。
冒頭。

ただでさえ長身なケルペラー氏が、
腕を一杯に振り上げ、タクトを振り下ろす。
宇宙の始まりの大爆発を感じさせるフォルテの1音で、
聴衆も、そして奏者も、この曲の世界に引き込まれていった。



続いてはフィロマンダリーネ単独でのステージ
演奏曲目は次の通り。

- ・舞踊風組曲第1番(久保田孝)
- ・亡き王女のためのパヴァーヌ(ラヴェル)
- ・ロマン的間奏曲(カペレティ)
- ・G線上のアリア(バッハ)

いずれもフィロマンダリーネの、そして久保田氏得意のプログラムで、
マンドリンの美しさや可能性を十分に聴かせることができる曲目である。
あまりトレモロを多用しないドイツのツプフオーケストラの聴衆に、
フィロマンダリーネの巧みなトレモロ奏法と、高度な表現力、
そして久保田氏の味わい深い音楽は、どのように聴こえるのだろうか。

パヴァーヌを演奏した辺りから、
会場全体の雰囲気が変わっていったのを感じた。
次はどんな音楽を聴かせてくれるのかね？と、
会場の興味、期待がどんどん高まっていた。
そんな中、単独ステージ最後に、
聴衆皆が好きであろうバッハとは粹である。



プログラム最後は再び合同演奏で、
久保田氏指揮による、幻想曲第1番。
リハーサルではしきりに、「パウゼ！パウゼ！（休め）」と
再三注意されたクライマックスのコーダ。
効果的な緊張を生む休符だが、演奏者のボルテージは上がり、
気持ちが先走り、どうしても早く入ってしまうのだ。
久保田氏は全身を使って、オーケストラを懸命にコントロールする。
本番では全員が心を合わせ、一瞬の空白が、
ものすごい緊張感を作り出していた。

曲が終わり、指揮者が手を下す。
全ての緊張を解くと、
聴衆からは待ってましたとばかりに、
スタンディングオベーションでの拍手喝さいであった。



遠く日本からやってきたオーケストラがどんな演奏をするのか、もの珍しい感じもあったのか、それまで閑散としていた会場が6~7割は埋まったと思う。

この日のプログラムは、昨日キードリッヒで演奏した幻想曲1番から。昨日の合同演奏も成功だったと言ってよいと思うが、本来のテンポより少し速くなってしまった部分もあったし、クボタメソッドの観点からも、本物の久保田孝の音楽であったとは言えない。そういった事もあり、この曲は本家の本物の幻想曲を聴かせたい！という思いが強かった。きっと皆そうだったはずだ。ドイツの聴衆には、音量と、そしてなにより音色が、斬新だったに違いない。

続けて演奏した、
・G線上のアリア
・亡き女王のためのパヴァーヌ
・ロマンの間奏曲
は、ここでも好評であった。

この日は3つの演奏会の中で、一番長いステージであった。新たに加えたプログラムである「荒城の月」では、日本の音楽を伝えることができた。コンサートマスターの宮崎氏による16小節にも及ぶソロは、とても見事であった。

日本音楽を聴かせた後は、ドイツ音楽。ドイツの作曲家であるシュベーンの名曲、「アーベントムジーク」今日はリハーサルが無くて、ぶっつけ本番。組曲である4楽章それぞれに難しい部分があるこの曲が無事に終わって良かった。ホッとしたという思いが強い。。。

ドイツの聴衆は音楽に対して自然体で素直。そんな中での演奏で鳴り止まない拍手とスタンディングオベーションをいただいた事は、何物にも代え難い喜びであり、私たちの音が認められた喜びである。最高に心地良いステージを味わった。

アンコールで演奏したジャズピッチカート(アンダーソン)も、好評だった。帰国後、演奏の録音を聴いたが、歓声、口笛や床を鳴らす嵐のような大きな拍手が、とても嬉しかった。フィロマンドリーネの音楽が認められた証した。

しかし、今回の演奏旅行には、仕事などの関係で、参加できない団員も多いた。そのメンバーが加わったら、もっと凄いんだぜ！無理な話であろうが、全員で来たかった。とても大きな拍手をくれた聴衆に、紀尾井ホールでの演奏を聴かせたいと思った。



アンコールの時間はありますか？
コンサート関係者に確認する久保田氏。



卒業した大学をバックに撮影。
これがカールスルーエ音楽大学のメインの校舎。
とても美しい外観である。



この日は祝日だったが、
校舎からは、熱心な学生のホルンの音色が聴こえてきた。



カールスルーエは、この城を中心に円形に町が広がっている。
銅像はカール大帝。

ドイツの演奏旅行は、
フィロマンダリーネ、そして久保田孝にとって、
大変意義深いものであると言える。

約40年前、
当時スタジオミュージシャンだった久保田氏は、
マンドリンやレキントギターの演奏者として活躍し、
音楽家として確固たる地位を築いていた。

しかし自分の音楽を追求するため、
それらを捨てて音楽留学。
最初の留学先となったのがドイツである。
ここカールスルーエ音楽大学の指揮科に四年間在学した。
さらにウィーン音楽大学の指揮科を卒業後、帰国。

帰国後は、多くのマンドリンの達人を1から育て上げ、
そのメンバーによって構成されているのが、
クボタ フィロマンダリーネン オーケスターである。
そして今、クボタメソッドを実践する優秀なオーケストラを引連れ、
かつて学んだ第2のふるさとでの、
コンサートを開催する運びとなった。
まさに凱旋コンサートである。



大学から歩いて5分程度。
これが、先生が留学されて、一番初めに住んでいたアパートです。
この先は行き止まりで、久保田氏の家は通りの一番奥です。



今回の演奏旅行のクライマックスとなるステージが、いよいよ始まる。
このフェスティバルでも、ヘッセンオーケストラと合同演奏を行う。

リハーサル。
フェスティバル会場近くにある、
期間中に滞在していたホテルの集会室で行った。
合同演奏する曲目は、
一週間前のキードリッチと同じである。
その時点で、既にある程度の完成を見たが、
こだわりの多い指揮者と、向上心の強いオーケストラは、
時間ギリギリまで、曲を作りあげていた。
我々フィロマンディーネは、演奏機会から遠ざかっていたため、
勘を取り戻す意味もあったが。



楽屋を出て舞台裏に到着。
まだ前の団体が演奏していたので、
息を押し殺して待機。
時間がおしているのか、中々演奏が終わらない。
その後は、フェスティバル関係者の挨拶がたくさん続いた。
ドイツ人のスピーチはとても長い。
そういう文化なのだ。
時に会場から歓声や笑いが起こり、
ユーモアを交えたスピーチなのだろうが、
残念ながら私には何を話しているのか、さっぱり解らない。

既に楽屋を出てから1時間以上経過していた。
いつも以上に緊張していた。
そんな中、これだけ長く待たされると、
それだけでとても疲れる。
しかし緊張は継続していた。
舞台裏にずっといたので、
会場の雰囲気ダイレクトに感じられた。
そのため、良い緊張を保ちつつ、気持は落ち着いてきた。



そして本番。1曲目はケルペラー氏のVishnu。
しかし、この日の演奏は、
なにか少し控えめで、ミスもあったように思えた。
1週間前は心を合わせようと、
お互い、がむしゃらに頑張って壮大な演奏となった。
今回は少し守りに入ってしまったのかもしれない。

2曲目は、久保田氏の舞踊風組曲第1番。
フィロマンディーネ単独での演奏である。
この曲は、久保田氏が留学中の1972年に
作曲されたものである。
ここドイツに縁のある曲であり、
久保田氏は演奏旅行のプログラムに
取り上げたのだろう。
冒頭。
マンダリンの入りは完璧だった。
日本で、その部分を
何度も何度も練習したのを思い出す。
続いてマンダラの美しいメロディー。
楽屋で、その部分を、
繰り返し練習していたのを聴いていたが、
この人たちは、本番で一番良い音を出す。
そしてクライマックスの変拍子の舞曲。
不用意に入ると、テンポが速くなりがちな部分だ。
全員が集中していた。
この曲のテンポだった。





最後の曲は、久保田氏の幻想曲第1番。
再びヘッセンオーケストラと合同で演奏する。
この曲は、日本とドイツ、
遠く離れた国の2つのオーケストラを結び付ける、
きっかけとなった曲である。
久保田氏の幻想曲第1番に、
感銘を受けたケルペラー氏は、
自分のオーケストラでこの曲を取り上げた。
この曲には、マンドロンチェロは欠かせないが、
ドイツでは、チェロが入らない編成がほとんどである。
そこでケルペラー氏は、楽器を新たに調達し、
ギター奏者にチェロを弾かせて、
演奏会で取り上げたのだった。
そのことはドイツでも話題となり、
ドイツの新聞にも掲載された。
彼らにとって、そんな思い入れの強い曲を、
その作曲者自らが指揮をして、
わずかな時間ではあったが、曲の解釈を施したことは、
ヘッセンのメンバーにとっては、
無上の喜びであったに違いない。



曲が始まった。
ヘッセンのオーケストラは、
クボタメソッドにも熱心に取り組んでいた。
冒頭の四分音符はバッチリだ。
指揮棒に、音がガッチリとはまっていた。
久保田氏の指揮はシンプルで、無駄が全くない。
その洗練された指揮は、世界一美しいとは思っている。
棒を見ていると、音が見える気がしてくる。
すごくいい。

クライマックスに向かうアレグロ。
ヘッセンのギターに引きずられて、
高まる気持ちと共に、テンポが少しずつ速くなる。
いいんじゃない。
最後のこの曲を楽しもう！



そして譜面が最後のページとなった。
もっと弾いていたい。
リハーサルで、細かく練習したところにさしかかる。
すると、演奏中なのに、そこを練習した時の事を思い出す。
ヒドイ英語で、ヘッセンのメンバーに指示した事とか。
ちゃんと弾いてくれたかなんて判らないし、
その音は一瞬で通り過ぎるけど、
この曲に、一生忘れない貴重な思い出ができた。
久保田氏が最もこだわった最後の3小節。
全員の呼吸も一つになった。

最後のクレッシェンド。
少し長くないか？
いつもクールな久保田氏も興奮気味だった。

魂の込もった、すばらしい演奏だったと思う。
聴衆の反応はどうだろう。
久保田氏は、やりきったという表情をしている。
奏者を立たせて、客席へ振り返る。
この日一番の大拍手であった。
ものすごい歓声と共に、一人二人と徐々に起立していく。
ここでもスタンディングオーベーションを頂くことができた。



そもそもスタンディングオーベーションとは、
アメリカの文化であり、ドイツでは珍しいことらしい。
実際、フェスティバル中にたくさんの他団体の演奏を聴いたが、
それを見かけることは無かった。
聴衆にはプロの方が多い中、フィロマンドリネだけが
スタンディングオーベーションを頂けたのは、大変貴重な事である。

やがて拍手は1つのリズムに纏まっていき、
大きな手拍子となった。
アンコールだ。
しかし今日は、コンサートではなくフェスティバル。
指揮者とコンサートマスターが退場しようとする、
聴衆はステージ前まで押し掛けてきて、アンコールを要求する。
私ももう一度弾きたかった。
みんな思いは同じだったと思うが、それは実現しなかった。
しかし、演奏は成功だったと実感した。
フィロマンドリネの、そして久保田孝の音楽が、
聴衆に伝わったという喜びを感じた。